

短縮語形成管見*

太田 聡

0. 序

本稿は、語形成 (word formation) の一種である短縮 (または省略) (abbreviation, shortening, clipping) について論じる。多音節語や複合語 (compound) の頭部、中部、尾部などを省略して短い語を作る短縮という語形成過程は、従来は、話し言葉——特に、俗語や仲間うちの隠語——において多くみられたものである。これが、現在では、せわしない世情を反映してか、書き言葉においてもごく普通に、そして頻繁に用いられる。例えば、「携帯電話やスマートフォンでインターネットを見て、電子メールを送る」は「携帯やスマホでネットを見て、メールを送る」といった具合であり、略さなければむしろ不自然に感じるほど略語が浸透している。また、こうした語の短縮形 (clipped form) は、単に発話・表記 (入力) の時間が短くて済むというだけでなく、様々なこと——言語的、文化的、芸術的なことなど——を解明するよい手がかりを提供してくれる。

本稿では、まず第1節において、日本語の短縮過程を論じる際には不可欠な韻律単位・概念であるフット (foot) について、英語のフットと関連付けながら、述べていく。第2節では、日本語の複合語や句の短縮形を論じつつ、その形成においてフットがいかに重要な役割を果たすかを解説する。第3節においては、フットが生み出す日本語のリズムに触れる。そして、第4節においては、長い外来語——ただし、複合語ではなく、単純語¹——の省略形に関する法則・制約について、先行研究の問題点も指摘しながら、考察していく。「ワード・プロセッサー」→「ワープロ」のように、原語が2つの単語から成る場合には、前半要素と後半要素のそれぞれから2拍ずつ取ることが原則である。しかし、原語が1語の場合には、「アポイントメント」は「アポ」、「アプリケーション」は「アプリ」、「エアロビクス」は「エアロビ」という具合に、略語の長さが2拍のものから4拍のものまであって、複雑である。従来、この略語の長さの決定に関して、音韻論的・形態論的観点から様々な条件や制約が提案されてきたが、本稿では、略語形成においては、競争相手 (competitor) の有無という単純な基準が働いていることを主張していく。つまり、例えば「アプリ」であれば、「アプ」だけでは「アプローチ」など他の語と混同する可能性があるため、もう1拍加えた「アプリ」が採用される、という見方をする。さらに第5節では、日本語の短縮語形成に関する本稿で提案したメカニズムが、英語の省略語にも適用可能であることを論じる。また、残された問題や、代案となりうる分析法も取り上げたい。

1. フットについて

1. 1. フットとは何か

「フット」とは、第一には、詩の韻律 (meter) を構成する基本単位である「詩脚」を指す。ギリ

シャ・ローマの詩では音節の長短が詩行のリズムを作っていたが、英詩では音節の強弱がリズムを構成する。² 次の(1)は、強弱四歩格 (trochaic tetrameter) で書かれた英詩の実例である (大文字と小文字は強勢 (stress) の有無を意図し、^は欠節を表す)。

- (1) WELcome, / RED and / ROUNDy / SUN, ^
DROPPing / LOWly / IN the / WEST; ^
NOW my / HARD day's / WORK is / DONE, ^
I'm as / HAPpy / AS the / BEST. ^
——J. Clare, *The Wood-Cutter's Night Song* より

詩の行における音節の強弱の組み合わせを格調といい、強勢のある音節と強勢のない音節が2つないし3つ集まってできる1つの単位がフット (詩脚) である。強弱四歩格で書かれた上の詩であれば、1行に「強弱」を4回繰り返すリズムになっているので、「1行に4つのフットがある」ということになる。

さてしかし、強勢のある音節とない音節がまとまって構成するものがフットであるのならば、なにも詩行だけでなく、1つの語の中にもフットを仮定することができるはずである (実際、上の詩の中でも、welcome や happy は1語で1フットを形成している)。³ 次の例では、アクセント符号を付し、1つずつのフットを<>で囲んで表記した。⁴

- (2) <Cinde><rélla>, <ánec><dòte>, <fàn><tástic>, <cámara>

このような英語の例に基づいてフットの定義を求めれば、それは「語と音節 (syllable) の中間的な韻律単位 (prosodic unit)」となるだろう。よって、これら3つの韻律単位の包摂関係を (上下の並びで) 表せば次の(3)のようになる。

- (3) 語
|
フット
|
音節

なお、音節よりも小さな韻律単位であるモーラ (mora) については、1.3.節で取り上げることにする。

1. 2. 英語のフットの実在性

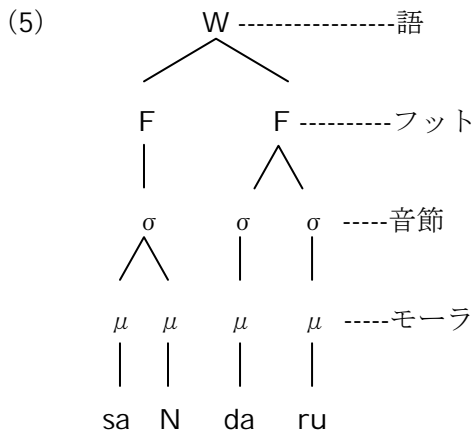
英語では、語気を強めたり、苛立ちを表したりするために fuckin (=fucking) などの虚辞的接中辞 (expletive infix) を語中に挿入することがあるが、それが許される位置は、(4a) に▲で示したようにフットの境界である。一方、(4b) のようにフットの切れ目ではないところに接中辞を挿入することは許されない。

- (4) a. fan-fuckin-tastic <fan>▲<tastic>
 fuckin
 b. *fanta-fuckin-stic, *fant-fuckin-astic, *fantas-fuckin-tic

こうしたことから、フットという単位は、英語の母語話者であれば無意識のうちに使いこなせ、韻律上実在するものであることがわかる。

1. 3. 日本語のフット

従来、強勢アクセントを用いるわけではない日本語のような言語には、フットという単位を仮定できるかどうかは不明であるとされてきた。しかしながら、フットが語と音節の中間的な単位であるのならば、日本語にもフットを措定できる。そして、「日本語のフットは2モーラから成る」というのが筆者の立場である。⁵ そうすると、例えば「サンダル」は、以下のような韻律上の階層構造を持つことになる。



つまり、この語は、4モーラ・3音節・2フットから成る1語ということになる。2つのフットにはそれぞれ2つのモーラが含まれていることに注目されたい。

2. 外来語複合語の短縮形とその類例

前節で、日本語では2モーラずつのまとまりをフットと捉える旨を述べた。本節においては、2モーラでひとかたまりとなることを、沢山の事例で示していくことにする。

まず、もっとも典型的な日本語の省略パターンは、外来語の複合語において、前半要素と後半要素のそれぞれから2モーラずつを取り出す以下のようなものである。⁶

- (6) ハンガー・ストライキ → <ハン><スト>
 プロフェッショナル・レスリング → <プロ><レス>
 パーソナル・コンピュータ → <パソ><コン>
 パンティ (一) ストッキング → <パン><スト>
 アンダーグラウンド → <アン><グラ>

ファミリーレストラン → <ファミ><レス>
 コスチューム・プレー → <コス><プレ>
 アニメソング → <アニ><ソン>
 ワーキング・ホリデー → <ワー><ホリ>
 ショービジネス → <ショー><ビズ>
 マタニティー・ハラスメント → <マタ><ハラ>

この2モーラずつ取り出して省略するパターンは、次の(7)に挙げたように、外来語複合語のみならず、漢語や和語が含まれているものや、(語ではなく)句や文にも広まってきた。⁷

- (7) a. メール友達 → <メル><トモ>
 外国人タレント → <ガイ><タレ>
 歩行者天国 → <ホコ><テン>
 連れ小便 → <ツレ><ション>
 番組宣伝 → <バン><セン>
 販売促進 → <ハン><ソク>
 女子アナウンサー → <ジョシ><アナ>
- b. 理想の結婚 → <リソ><コン>
 朝のシャンプー → <アサ><シャン>
 サラリーマンの昼飯 → <サラ><メシ>
 育児をする男性(メンズ) → <イク><メン>
 アジテーションとプロパガンダ → <アジ><プロ>
 あけましておめでとう(ございます) → <アケ><オメ>
 リアル(現実)の生活が充実している人 → <リア><ジュー>

さらに、2モーラずつ取り出して省略するパターンは、人名・バンド名、テレビ番組や映画・小説・漫画などのタイトル、商品名、会社名などに広く見られる。

- (8) a. 木村拓哉 → <キム><タク>⁸
 ドリームズ・カム・トゥルー → <ドリ><カム>
 SEKAI NO OWARI → <セカ><オワ>
- b. 『爆笑オンエアバトル』 → <オン><バト>
 『クレヨンしんちゃん』 → <クレ><シン>
 『世界の中心で、愛をさけぶ』 → <セカ><チュー>
 『こちら葛飾区亀有公園前派出所』 → <コチ><カメ>
 『あぼやん』(空港(airport)、略してapo、で働く人のこと)
- c. 味付けぽん酢 → 「味ポン」(株ミツカン)
 コクのあるまるやかなカレー → 「こくまるカレー」(ハウス食品)

- チーズ入り蒲鉾 → 「チーかま」(栴丸善)
 d. テレビ朝日 → <テレ><アサ>
 京都セラミック → 「京セラ」⁹

日本人がいかにかたまりを好むかは、以下に例示したように、いわゆる業界用語の造語法——倒置——や、愛称の作り方、意味の切れ目を無視した発話上のまとまり、数字や曜日の読み上げ方、綴りや意味がよくわからない外国語の言い方などからも窺える。単純に入れ替えたり、そのまま読んだのでは2モーラにならないときには、音を足したり削ったりして2モーラずつになるようにしていることに注目されたい。また、(9f)のような新しい(いくぶんおどけた)表現には、2モーラの倍の4モーラから成るコーロン(colon)と呼ばれる単位が用いられたと見なすことができるものもある。

- (9) a. ハワイ → <ワイ><ハー>
 うまい → <マイ><ウー>
 サングラス → <グラ><サン>
 よろしく → <シク><ヨロ>
 そっくり → <クリ><ソツ>
 お洒落 → <シャレ><オツ>
 オッパイでかい → <パイ><オツ><カイ><デー>
 b. ちひろ → <チー>ちゃん
 さとし → <サッ>ちゃん
 c. 佃煮 → ツク・ダニ¹⁰
 見回り → ミマ・ワリ
 d. 1、2、3、…… → イチ、ニ一、サン、……
 月、火、水、…… → ゲツ、カ一、スイ、……
 e. a cappella → アカ・ペラ
 Santa Lucia → サン・タル・チア
 f. 「私たちって、ツダツダしい(=津田塾の学生らしい)よね。」
 (⇒「すがすがしい」などと同じパターンか?)

ちなみに、インターネットスラングでは、「おめ(=おめでとう)、あり(=ありがとう)、乙(=お疲れ様)、こn(=こんにちは/こんばんは)」などのように使用頻度の高い挨拶ことばなどが2モーラ1フットに短化される。なお、「フルボッコ(=フルパワー/フルメンバーでボッコボコ)」のように、強調のために3モーラを使った短縮例もある。

ところで、本節の最後に、短縮形とそのアクセント型に関する疑問に触れておきたい。日本語の4モーラから成る複合語(や人名の)短縮形は、「ファミレス」、「ホコテン」、「キムタク」のように平板型アクセント(無アクセント)になってしまい、元々のアクセント——「ファミリーレストラン」、「ホコーシャテ↓ンゴク」、「キムラタ↓クヤ」(↓はピッチの降下を表す)——は無視してよい。では、

「リア充」が「リア↓ジャー」となるのはなぜなのであろうか？ Kubozono (1996) は、「アメリカ」や「イギリス」は無アクセントでも、無意味語の「ア↓メリン」や「イ↓ギリ」などにはアクセントが与えられることから、無アクセントになるには、単に 4 モーラというだけでなく、「～リカ」、「～リス」のように語末が軽音節 (light syllable) の連続になるという条件を指摘している。となると、「リアジャー」は重音節 (heavy syllable) で終わるのでアクセントが付くとすべきなのであろうか？ しかしそうすると、「パソコン」や「ホコテン」はなぜ無アクセントでよいのであろうか？ 「リアジャー」は (4 モーラ短縮形ではあっても) 複合語の短縮形ではないので、「パソコン」などとは別扱いにすべきなのであろうか？ ならば、「リソコン」はどうして無アクセントなのであろうか？ また、「リ↓アジャー」とはならないのはなぜなのか？ このように、短縮形には、(単にその出力されたものの長さが 4 モーラになるということだけでなく、) アクセントと関連付けて考察すると、まだ不明なことが多い。

3. 日本語のリズム

日本人・日本文化は奇数好みに見える。つまり、以下に列挙するように、様々な場面で奇数が好んで用いられるのである。

- (10) ・結婚式： 三三九度
 ・応援団： 三三七拍子
 ・子どもの成長を祝う行事： 七五三
 ・めでたい日： 1月1日／元旦
 3月3日／桃の節句
 5月5日／端午の節句
 7月7日／七夕
 9月9日／重陽

また、次の (11) に例を挙げたように、各種標語や記憶に残るコマーシャルも 5 拍と 7 拍が利用されている。

- (11) a. とび出すな 車は急に止まれない
 怖いのは「消したつもり」と「消したはず」
 b. 亀田のあられ・おせんべい♪ (亀田製菓)
 痛くなったら、すぐセダス (塩野義製薬)

しかし、表面的な音数にとらわれて日本語の韻律を論じるのは禁物である。例えば三三七拍子は、休止部分 (○で表す) を 1 拍に数えれば、以下のように四四八拍子となる。

- (12) チャッ、チャッ、チャッ、○。チャッ、チャッ、チャッ、○。
 チャッ、チャッ、チャッ、チャッ、チャッ、チャッ、チャッ、○。

また、別宮（1977）で論じられているように、五七五（七七）の俳句や短歌も、休止部分を勘定に入れれば、以下のように八八八（八八）となる——1音に8分音符を1つあて、2音をもって4分の4拍子の1拍を作るものとしている（○は八分休符、◎は四分休符を意図している）。

- (13) 4/4 ♪ ♪ ♪○◎ ♪ ♪ ♪ ♪○ ♪ ♪ ♪○◎
 ナツクサヤ ツワモノドモガ ユメノアト

ちなみに、別宮（1977）の「日本人は三拍子のワルツの演奏が苦手である」という指摘も非常に興味深い。

結局、日本語では、2モーラ1フットが韻律の基本単位であり、その倍の4モーラや、さらに倍の8モーラが、リズム上のまとまりを構成すると考えることができよう。そして、このリズムの特徴は、名作と評されるような子ども向け絵本の中にも現れる。(14)は中川李枝子作『ぐりとぐら』（福音館書店）の一部である。記憶に残る名文句は、8モーラずつのまとまりから成っているとしてよかろう。

- (14) [ぼくらの なまえは] [ぐりと ぐら○○○]
 [このよで いちばん] [すきなのは○○○]
 [おりょうりすること] [たべること○○○]
 [ぐり ぐら ぐり ぐら]

4. 非複合外来語の短縮について

4. 1. 先行研究の成果と問題点

本節以降では、複合語ではなく、単純語である外来語の省略について考察する。日本語では、英語からの借用語を中心に、数多くの外来語が使われているが、長い語であればその多くは短縮形を持っている。そして、複合語（や句の）短縮の場合のように2モーラずつを抽出すればよいというわけではなく、(15)に代表例を挙げたように、2～4モーラというバリエーションがあつて複雑である。だが、原則は、5モーラ以上の語を2～4モーラの長さに縮めるということである。¹¹

- (15) a. ストライキ → スト
 b. ロケーション → ロケ
 c. テレビジョン → テレビ
 d. ローテーション → ローテ
 e. イラストレーション → イラスト

このような単純語の短縮に関する代表的な先行研究（Ito（1990）、Kubozono（2003）など）で示された制約類は、以下の通りである（L＝軽音節＝1モーラ音節、H＝重音節＝2モーラ音節）。

- (16) a. 1モーラや5モーラの出力形は許容されない。
 (例) イラストレーション → *イ、*イラストレ
- b. 1重音節 (H) は許容されない。
 (例) ローテーション → *ロー
 シンポジウム → *シン
- c. 軽音節+重音節 (LH) の3モーラ形は許容されない。
 (例) ロケーション → *ロケー
- d. 軽音節+重音節+軽音節 (LHL) の4モーラ形は許容されない。
 (例) ロケーション → *ロケーショ

しかし、このように出力形に合わせて制約・条件をいくつもこしらえていくのは好ましい一般化とは言えない。(何でも説明できるものは何も説明していないのと同じことである。)そして、(16)を用いても、次の(17)で「?」を付けたような形がなぜ現れないのかが説明できない。

- (17) a. ストライキ → ?ストラ
 b. テレビジョン → ?テレ、?テレビジョ
 c. イラストレーション → ?イラ、?イラス

では、モーラや音節数以外の観点から可能な短縮形について論じた研究を振り返ってみよう。Labrune (2002) は、次の(18)のように、アクセントの位置を基準にした制約を提案した。

- (18) 入力のアクセント (核) の前で短縮が起こる。
 (例) イラストレーション → イラストφ

つまり、「イラストレーション」では「レ」にアクセントがあるので、それよりも前の「イラスト」という部分が残る、というわけである。この Labrune 説に従えば、例えば influenza が、英語では flu と略されても、日本語では(「インフルエンザ」なので)「インフル」と略されることなどが説明できそうで、興味深い面がある。しかしながら、このアクセント位置に基づく短縮語の説明では、例えば、「テレビジョン」、「インフレーション」、「アニメーション」などが(「テレビ」、「インフレ」、「アニメ」ではなく)「テレ」、「インフ」、「アニ」となると誤った予測をしてしまう。つまり、Labrune 説は、ある短縮形にとっては好都合でも、他の短縮形にとってはむしろ不都合という結果になってしまうのである。

次に取り上げるべきは、窪菌 (2004) や窪菌・小川 (2005) の提案で、(「携帯電話」という複合語から「携帯」という前半部分が残るように)「イラストレーション」は擬似複合語 (pseudo-compound) ——「イラスト+レーション」——と分析できるので、「イラスト」が残る、というものである。そして、窪菌 (2010) は、この擬似複合語という捉え方をさらに精緻化し、以下の分節原理にまとめている。

- (19) a. 音節を分断せずに、前半と後半をできるだけ同じ長さ（モーラ数）に分ける。
b. aにより二等分に分節できない場合には、前半>後半とする。¹²

たしかに「～レーション」で終わる外来語はかなりあるので、その部分を「複合語の後半要素的なもの」と考えてもよいかもしれない。また、窪菌（2010）は、4モーラ語の「エロ本」に対して、5モーラ語の「エッチ本」となると「本」に（複合語の特徴である）連濁が起こることなどを証拠にして、5モーラ以上の語は音韻的に複合語と見なしてよいとしている。¹³

しかしながら、窪菌の分析・提案を他の様々な例に適用してみると、すぐに問題点が浮かび上がってくる。例えば「テレビジョン」は、「遠い (tele) 像を見ること (vision)」という語源からしても、また、「ハイビジョン」などの他の例と関連させてみても、二分するのであれば（「テレビ | ジョン」ではなく）「テレ | ビジョン」と分ける方が絶対に自然である。さらに、例えば、「オペレーション」、「デモンストレーション」、「アポイントメント」などを(19)に従って分割すれば、（「オペ」、「デモ」、「アポ」ではなく、）「オペレ（ー）」、「デモンスト」、「アポイン」といった誤った形を予測してしまう。

結局、Labrune 説も窪菌説も、特定の例の説明には非常に有効であるように見えるのだが、種々の例に適用範囲を広げていくと、ごく普通の例がうまく扱えなかったり、かえって矛盾を引き起こしたりするのである。

4. 2. 試案

では、本節において、代案を提案してみたい。結論を先取りして言えば、短縮語形成に関する私見は、次のようにまとめることができる。

- (20) i. 音韻的な基準・制約は実はあまり重要ではない。
ii. 短縮した結果意味が通じなくなるとは元も子もない。
iii. 候補語多数ではいけない。
iv. どの語か同定 (identify) できるまで長くする。

やや脱線のように感じられるかもしれないが、ここで我々の語彙数ということに触れておきたい。例えば、William Shakespeare は非常に語彙が多かったとされるが、彼の作品中の語彙を収録した Alexander Schmidt の *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* に載っている語彙数は、約5万語である。であれば、ごく普通の人の語彙数は3~4万語程度と推察される。よって、外来語の短縮形とその原語についての考察では、『広辞苑』などではなくて、例えば、小学生にも適した『例解学習国語辞典』（小学館）（以下『例国』と略す）に載っている程度のものを問題にすればよいはずである。

参考までに、インターネット上でも確認できる以下の「ボキャ貧テスト」（NTT データベースシリーズ『日本語の語彙特性』を参照）で確認してみよう。

- (1) チャンピオン (2) 祝日 (3) 爆発 (4) ライン (5) さつま芋
 (6) 毒ガス (7) 枝豆 (8) 過ごす (9) 朝風呂 (10) そもそも
 (11) 見極める (12) 香ばしい (13) 本題 (14) エンゲル係数 (15) 泊まり込む
 (16) 預け入れる (17) 言い直す (18) たしなみ (19) 英文学 (20) はまり役
 (21) ごろ合わせ (22) 労力 (23) 忍ばせる (24) 勃発 (25) 宿無し
 (26) 目白押し (27) 請負い (28) 塗り箸 (29) 気丈さ (30) 茶番
 (31) 大腿骨 (32) 術中 (33) 泌尿器 (34) 血税 (35) 悶着
 (36) 腰元 (37) 裾模様 (38) 旗竿 (39) かんじき (40) すっこむ
 (41) 迂曲 (42) 告諭 (43) 辻番 (44) ライニング (45) 輪タク
 (46) 懸軍 (47) 陣鐘 (48) 泥濘 (49) 釜がえり (50) 頑冥不靈

[推定語彙数]

- (10) まですで 8,800 語
 (15) まですで 13,000 語
 (20) まですで 18,000 語
 (25) まですで 23,000 語
 (30) まですで 30,000 語
 (35) まですで 39,000 語
 (40) まですで 50,000 語
 (45) まですで 60,000 語
 (50) まですで 70,000 語

このテストにおいても、推定語彙数が軽々5万語を超える人はそれほど多くないはずである。そこで、一般の人の語彙数を3~4万語として論を進めることにする。

議論を単純化して、五十音図に含まれる文字(音節・モーラ)数を50として均等に3~4万語を割ると、一つの仮名文字で始まる語は600~800語ということになる。この中で、5モーラ以上の長さを持つ外来語と限定していけば、おそらくその数は30~40語となろう。そして、それをさらに単純語に限るようにし、また、清音・濁音、直音・拗音の区別も行えば、その数を半分以下にすることができよう。しかしそれでも、同音で始まる候補語が10~20語ほど存在する場合は多いはずである。この推定に基づいて、「テレビ」が「テレビジョン」の略語として認定される作業、すなわち、絞り込みのイメージを示せば、以下のようになる。ここで挙げた語彙は『例国 第六版』(1990)からとった。¹⁴

(21)

◀ アガリ

「テ」	→	「テレ」	→	「テレビ」
競争相手： 約 10 語		競争相手： 「テレタイプ」 「テレックス」 「テレパシー」		競争相手： φ

「テ」だけでは、「テ」で始まる語がいくつもあって、何を表しているのかわからない。そこで「テレ」と長くするのだが、それでもまだ「テレパシー」などの可能性があってあいまいである。よって、さらに長く「テレビ」とすれば、(φで表したように) 競合するもの——同じ音・文字を持つ外来語——がなくなり、(アガリと表現したように)「テレビジョン」のことと特定できるのである。¹⁵

同様に、例えば「コンパニー (company)」が「コンパ」となる (ちなみに「カンパ」はロシア語の「カンパニア (kampaniya)」の略) のも、「コン」だけでは「コンクール」、「コンクリート」、「コンサート」、「コンセント」、「コンチェルト」、「コンディション」、「コンテスト」、「コントラスト」、「コントラバス」、「コントロール」、「コンバイン」、「コンビナート」、「コンビネーション」、「コンプレックス」、「コンベヤー」など競争相手が多数なので、「コンパ」と3モーラ必要になると説明できよう。¹⁶ つまり、「コン」が重音節だから許されないという (16b) による説明である必要はまったくないのである。

その他に本論の提案の支持となる例——『例国 第九版』に少なくとも原語が載っているもの——を、競争相手のことにも触れながら、以下に挙げていくことにする。

- (22) a. デマゴギー → デマ (「デ」だけでは「デコレーション」、「デザイナー」、「デノミネーション」、「デメリット」、「デモクラシー」などから区別できない。)
- b. リハーサル → リハ (「リ」だけでは「リアリティー」、「リクエスト」、「リサイタル」、「リニューアル」、「リバーシブル」、「リフレッシュ」、「リポーター」など候補語が多数である。)
- c. アンケート → アンケ (「アン」だけでは「アンコール」、「アンサンブル」、「アンパイア」、「アンモナイト」、「アンモニア」などと区別できない。)
- d. オーケストラ → オケ (「オ」だけでは「オークション」、「オーディション」、「オキシドール」、「オクターブ」、「オブザーバー」、「オブラート」、「オランウータン」、「オリンピック」、「オルゴール」など多数候補があって紛らわしいが、「オケ」であれば対抗するものはない。)
- e. シンポジウム → シンポ (「シン」だけでは「シンセサイダー」、「シンフォニー」などと区別できない。)
- f. ダイヤモンド → ダイヤ (「ダイ」だけでは「ダイエット」、「ダイオキシン」、「ダイジェスト」、「ダイナマイト」、「ダイビング」などの候補語があってあいまいである。)
- g. フェスティバル → フェス (「フェ」だけでは「フェンシング」などと区別できない。)

- h. オートマチック → オートマ （「オート」だけでは「オートバイ」、「オートメーション」などから区別できない。）
- i. プロフィール → プロフ （「プロ」だけでは「プロジェクト」、「プロダクション」、「プロテスタント」、「プロデューサー」、「プロフェッショナル」、「プロポーション」、「プロポーズ」、「プロレタリア」、「プロローグ」、「プロンプター」など、競争相手が多数である。）¹⁷
- j. コンビニエンス（ストア） → コンビニ （「コンビ」だけでは「コンビネーション」、「コンビナート」などと区別できない。）
- k. アプリケーション → アプリ （「アプリ」だけでは「アプローチ」などの競争相手がある。）
- l. パンクチュア → パンク （「パン」だけでは「パンタグラフ」、「パントマイム」、「パンフレット」などと区別できない。）
- m. パンフレット → パンフ （(22l) を参照）

さらに、『例国』には原語が載っていない語彙であるが、日常よく耳にする短縮例であり、上述の提案に沿って適切に説明できるものを、競争相手になり得る語と共に挙げよう。¹⁸

- (23) a. オペレーション／オペレーター → オペ （(22d) を参照。「オペレッタ」という5モーラ語はあるが、これはイタリア語からの伝来語であり、歌劇を表すやや特殊な用語であるので、競争相手にはなりにくいであろう。）
- b. アポイントメント → アポ （「ア」だけでは「アーチェリー」、「アクセサリー」、「アクセント」、「アクロバット」、「アシスタント」、「アスレチック」、「アセチレン」、「アップリケ」、「アドバイス」、「アトラクション」、「アナウンス」、「アプリケーション」、「アプローチ」、「アラカルト」、「アルコール」、「アルバイト」、「アルファベット」、「アルミニウム」、「アレルギー」、「アンコール」など候補が多すぎる。なお、「アポ」でも「アポストロフィー」という可能性が残るが、「10 時にアポを入れる」というような使い方は「アポイントメント」の方しかしないので、判別できよう。）
- c. コンペティション → コンペ （既述の「コンパ」を参照）
- d. コンポーネント → コンポ （同上）
- e. インフラストラクチャー → インフラ （「インフ」だけでは「インフルエンザ」、「インフレーション」などがあるため不十分である。）
- f. メンテナンス → メンテ （「メン」だけでは「メンタリティー」、「メンソール」などと区別できない。）
- g. ファンデーション → ファンデ （「ファン」だけでは「ファンタジー」などと区別できず、また、fan と混同する。）
- h. インポテンツ → インポ （「イン」だけでは「イングリッシュ」、「インスタント」、「インストール」、「インストラクター」、「インスピレーション」、「インターチェンジ」、「インターバル」、「インターン」、「インタビュー」、「インディアン」、「インテリア」、「イ

ントネーション」、「インパクト」、「インフォメーション」、「インフルエンザ」、「インフレーション」など候補語多数なので、3 モーラ目の「ポ」まで必要である。）

(22) と (23) に挙げた例は、(16) の制約類や、アクセントを頼りにする Labrune 説や、擬似複合語という概念を用いる窪菌説によらずとも（あるいは、アクセント説や二等分法では誤った予測をしてしまう「アポイントメント」などであっても）、競争相手の有無という観点から、明快な説明が可能となるのである。

また、外来語というわけではないが、例えば（複合語の）「つけまつげ」は「つけま」という具合に短縮形を 3 モーラにするのも、「つけ」だけでは「つけやきば」などと混同するから、といった説明ができるのではなからうか。

なお、以下に挙げるような例は、本論にとっては有利とも不利とも言えないものである。

- (24) a. エアロビクス → エアロビ
b. プレゼンテーション → プレゼン
c. オリエンテーション → （新入生・新入社員）オリ
d. （ネットやメールの話題で）レスポンス → レス
e. コラボレーション → コラボ

「エアロ」で始まる外来語は、『例国』では「エアロビクス」しか見当たらないので、その略は（「エアロビ」ではなく）「エアロ」で十分という予測になる。本論では、ごく普通の人の語彙数に合うようにと、収録語数の多くない辞書に基づいた例示をした。しかし、多くの略語を生み出すのは若い世代であり、そして彼・彼女らが日々接するのはインターネットであるので、例えば、Google での変換候補などを参考に競争相手を挙げていった方が好ましいのかもしれない。試しに Google 検索で「えある」と入れてみると、「エアロバイク」、「エアロスミス」、「エアロゲル」、「エアロビクス」、「エアロポステール」、「エアロフレックス」、「エアロプレス」といった候補が出てくる。であれば、「エアロビ」と第 4 モーラまで示さなければ「エアロビクス」に特定できないと言えよう。次に、(24b, c, d) の「プレゼン」、「オリ」、「レス」といった短縮形では、「プレゼント」、「オリエンテーリング」、「レストラン」や「レスリング」といった候補との区別が問題となる。しかし、これらは、提示・説明の場において、学校・会社の行事に関連して、ネットやメールに関する話題で、といった具合に、それらが使われるコンテキストによって何を指すのかが十分に推定できるので、それ以上長くある必要はないのであろう。¹⁹ (24e) の「コラボ」の場合、「コラ」で始まる 5 モーラ以上の外来語はあまりないので、「コラ」だけでも十分ではないかと思われる。しかし、この「コラボ」という略語は、音楽関係者などのいわば専門用語的なものであるので、少し特殊なのかもしれない。²⁰

あと二つ注意すべき点を補記しておこう。「バスケット（ボール）」→「バスケ」という短縮には、別の条件が働いているようである。「バス」で始まる外来語は、複合語であれば「バス・タオル」、「バス・ルーム」、「バス・ローブ」、「バス・ターミナル」のようにいくつかあるが、単純語では見当たらない。ならば、「バス」という略し方でも大丈夫と思われる。しかし、それでは既存の「バス (bus, bass, bath)」と区別がつかなくなるので阻止され、「バスケ」とならざるを得ないのであろう。また、共に

物価に関する経済用語であっても、「インフレーション」の略は「インフレ」と4モーラだが、「デフレーション」の略は3モーラの「デフレ」という具合に長さが異なる。これは(基体部分は同じでも、)接頭辞の in-と de-の違いが反映されているだけで、「インフレ」の方が競争相手が多かったので長くなった、というわけではない。

5. まとめと展望

短縮語に関して従来の研究で唱えられてきた「LH という並びは許されない」というような制約では、例えば*He are students.が非文法的であることを、「三人称単数主格の人称代名詞と be の複数形および二人称単数直接法現在形と名詞の複数形は共起しない」と言っているようなものではないだろうか? あっさり「人称・数が一致しないからアウト」と説明すべきであろう。よって、短縮形についても、排除すべき組み合わせを個別に指定しておくよりも、「競争相手がいるか・いないか」という単純明快な基準で説明する方が優れていると思われる。

5. 1. 英語への応用

さらに、日本語の略語形成パターンに基づいて、「1 重音節は不可: ローテーション → *ロー」等の制約を設けていっても、言語普遍的な議論にはならず、個別言語的な決まりを追求しているにすぎないことが問題である。例えば、英語では professional/prostitute → pro [prou]などが可であり、略語で1重音節が排除されるわけではない。一方、本論のように、競争相手がいなければ短くてもよいが、競争相手が多ければ(区別のために)長くならざるを得ないという捉え方であれば、日本語以外にも適用できる。例えば、examination の略が ex ではなく exam となるのは、ex-だけでは候補語が多すぎて同定できないからであろう。他にも、information → info, discotheque → disco, prefabricated house → prefab などは、in-, dis-, pre-だけでは候補語が多すぎたので2音節目が必要であったと説明できよう。また、advertisement → ad といった短縮形は、一見短すぎてあいまいになりそうだが、administration には admin. という略語があり、advantage → ad という省略はテニス用語に限られるであろうから、問題ない。もし、advertisement を窪菌説に従ってほぼ二等分すると、advert しか認められなくなることに注意されたい。

なお、influenza → flu, refrigerator → fridge などは、in-や re-で始めては競走相手が膨大だし、influ, refridge ではやや長くなりすぎるので、合理的に——すなわち、無駄な競争を回避するために——中ほどを採用したのであろう。つまり、競争相手がなくなるまで伸ばす、いなければ伸ばさない、という本論の説が間接的に支持されるのである。²¹ Street の略としては St.が確立しているので、Station の方は Sta.を用いることも、本論の考え方の正しさの傍証となる。

5. 2. 残された問題

本節では、本論の提案だけでは説明できずに残る問題と、それを解決するための新たな視点などについて述べてみたい。

「イラストレーション」から略語を作る場合、本論の提案に基づけば、「イラ」で始まる語はほとんどない(つまり競争相手がいない)ので、短縮形は「イラ」と予測されてしまう。よって、なぜ「イラスト」という具合に長めの略語を使用するのかが不明のままである。窪菌晴夫氏(個人的対話)は、

「イラストレーション」のように 8 モーラもある長い語は、(例えば「ストライキ」のように 5 モーラしかないような語に比べて、) 略語も長くなると主張する。直観的には(略語も、元々が)長いものは長く、短いものは短くなる、というのは正しいように感じられる。しかし、そうであれば、なぜ「イラストレーション」以上に長い「デモンストレーション」の略語を「デモンスト」としないのであろうか? やはり、原語の長さ基準ではうまくいかないのである。では、「イラストレーション」から「イラスト」が生じることをどのように説明すればよいのであろうか? この問題を筆者のゼミ生たちに投げかけたところ、以下のような面白い意見が挙げられた。

- (25) a. 業界では「イラ」と略すかもしれない。
b. 「イラスト・プリンター」など、複合語の要素として「イラスト」を使うので、もはや「イラスト」を略語として意識していないのでは? また、「イラスト」が「イラストレーション」の略と(知っているのはインテリで、)知らない人が多いはず。
c. 「スト」や「デモ」は新聞紙面などによく載った語だろうから、短いものが好まれたはずである。しかし、「イラスト」はそれほど紙面に載った語とは思われない。だから、極端に短くする必要はなかったのではないか?
d. 最初に「イラスト」を使った人は、「パソコン」みたいに(4 モーラの)「イラスト」がカッコいいと思って言ったのでは?

これらは推測にすぎないが、実は当たっている面もあるかもしれない。より確かな議論のためには、それぞれの略語ができた経緯・歴史などもしっかりと調べなくてはなるまい。しかし、それはこの拙稿の射程外である。

最後に、「イラスト」という短縮形が生じることに関する説明として、より穏当な代案を示して締めくくりとしたい。第 2 節と第 3 節で詳述したように、2 モーラ 1 フットが日本語のリズムの基本単位であるならば、非複合語の短縮形にも、2 モーラ 1 フットが基本的に採用されると考えてよいであろう。そして、2 モーラだけでは不十分な場合には、その倍の 4 モーラ語が——ちょうど複合語短縮と同じように——現れるであろう。「イラ」だけでは何が不十分であったのかははっきりしないが、「イラス」ではなく「イラスト」となったのは、フット(あるいはコーロン)という単位が関与しているものと思われる。「リハビリテーション」や「インテリゲンチャ」が、「リハビ」や「インテ」でも十分なはずだが、「リハビリ」、「インテリ」となっていることも示唆的である。²² そして、3 モーラの短縮形の方が、何らかの別の要因(例えば、注 15 や 4.2 節の終わりのあたりで「テレビ」や「バスケット」に関して触れたような事柄)が働いた特殊・例外的なものなのかもしれない。

注

* 本稿は、山口大学時間学研究所主催の第 25 回時間学セミナー(2013 年 3 月 1 日、於:山口大学総合研究棟フォーラムスペース)、および東京音韻論研究会(TCP)の例会(2013 年 4 月 20 日、於:東京大学駒場キャンパス)において講演した内容をまとめたものである。参加諸氏から多くの質問・コメントをいただき、内容再考に大いに役立った。

また、貴重なヒントを与えてくれた卒業研究のゼミ生たち（山内是人、岡野智世、前田美穂）にも感謝したい。

1. 本稿では、接辞の付いた派生語 (derivative) であっても、独立した語としての要素が 1 つしか含まれていないものは「単純語」と呼ぶことにする。

2. 『現代言語学辞典』(成美堂、1997) には、“foot”という用語の解説で、「古典詩学において、リズムの単位は足を叩くことから定義されると考えたことに由来する」とある。しかしこれは、「足で叩く」が正しいのではないかと思われる。

3. 以前は、foot を「韻脚」という具合に多少無理に訳していたが(『学術用語集 言語学編』(日本学術振興会、1997)などを参照)、窪菌(1995)および窪菌・太田(1998)であっさり「フット」という訳語を採用して以降は、音韻論系の学会では「フット」の使用が定着してきた。本節の内容はこの窪菌・太田(1998)の第Ⅱ部第3章を基にしている。

4. 例えば anecdote は <anec<dote ʌ> という具合に欠節を仮定できよう。また、詩でも「強弱弱格」(dactyl)があるので、camera を全体で 1 フットとして扱ってもおかしくはない。

5. 「モーラ」とは「拍」とほぼ同じ意味で用いられ、基本的に、仮名 1 文字に相当する長さが 1 モーラである——ただし、拗音の「きゃ」などは、2 文字用いても長さは 1 モーラである。日本語の音節構造は比較的単純なので、多くの場合、1 音節は 1 モーラと一致する。しかし、長音(ー)、促音(っ)、撥音(ん)および二重母音が含まれるときは、2 モーラで 1 音節になる。

二重母音が存在する証拠として、例えば「入学式」と「開会式」のアクセントを内省していただきたい。「式」のような短い語が後半に付いた複合語は、前半要素の最後にアクセント(核)、すなわちピッチの滝が生じるものである。「入学式」では -ku- でピッチが落ちるのに対して、「開会式」では、「会(kai)」の i ではなく a でピッチが落ちるので、a が音節の中心となった二重母音を仮定すべきである。そのため、/kaJ/ や /kay/ といった音素表記も用いられる。

6. 例えば、(かなり古い、あるいは、古くからある例であるが)「モダンガール」→「モガ」、「ベースアップ」→「ベア」などは 1 モーラずつしか残していない。これらは、長音・促音といった特殊モーラが含まれていることが関係した例外と言えるかもしれない。なお、「フリーマーケット」→「フリマ」、「スノーボード」→「スノボ」、「家庭教師」→「カテキョ」などのように、後半要素に長音が含まれる場合には、後半だけ 1 モーラにする例が多いことにも注意されたい(ところが、「スノボー」や「カテキョー」もあり、さらに、「スケートボード」の略はなぜか「スケボー」となるので、ややこしい)。しかし、「スカイパーフェク TV」→「スカパー」、「モバイルゲーム」→「モバゲー」、「ロンドンブーツ 1 号 2 号」→「ロンブー」のように、後半要素の長音がそのまま残る略称にもままたくわす。一方、「ロイヤルホスト」→「ロイホ」、「スマートフォン」→「スマホ」、「理系女子」→「リケジョ」のように、長音がなくても 3 モーラにとどめる例も最近が増えてきた。

7. 複合語の短縮形と混成語 (blend) は、2 語から一部ずつを取り出すという意味では同じように見えるので、区別が難しい場合がある。そして実際、影山ほか(2004)においてさえ、日本語の混成語の例として「デジタルカメラ」の短縮形の「デジカメ」が挙げられるといった混乱が見られる。(混成語とは、brunch ◊ breakfast + lunch のように、原語とは異なるものを指すように作られることに注意されたい。)しかし、英語の場合には意外と簡単な区別の方法がある。Bauer(1983)によると、複合語のアクセントを保っていればそれは複合語の短縮形と判断してよい(例: mɪdˌkʌlt ◊ middlebrow culture, sɪtˌkɒm ◊ situation comedy)。一方、混成語ならば Eurásia ◊ Europe + Asia のように単純語のアクセントを示すものが多い。

8. この例は、「山口大学」→「山大」のように漢字を一字ずつ取り出す省略とは異なることに注意されたい。もし漢字を一字ずつ取るのであれば、「キタク」になるはずである。

9. 「セラミック」という限定的な名称が付いていない方が業種拡張には都合がよい、というメリットも短縮形にはある。京セラの他にも、例えば「東洋陶器」が「TOTO」という社名になったことも業種拡張に役立ったに違いない。
10. この例として、「火遊び → ヒア・ソビ」などを挙げていたところ、TCP 例会において橋本大樹氏から「単に複合語アクセントが与えられて 2 番目のモーラが目立っているだけで、ポーズがあるわけではない」とのご指摘を受けた。そこで、用例を平板式アクセントになるものに入れ替えた。
11. 長くはない語をことさら略す必要はないので、略されるのは一定以上の長さを持った語であり、その長さは、基本的に 5 モーラ以上というわけである。しかし、「アマチュア」→「アマ」のように 4 モーラ語であっても略される例はある。
12. この b の規定により、例えば 5 モーラ語の「テレビジョン」は、3 モーラの「テレビ」と 2 モーラの「ジョン」に分けられる。なお、「ローテーション」を (19) に従って分ければ「ローター | ション」となるが、実際の出力は「ローテ」になる。これは、例えば「本当」、「格好」の語末長母音が「ホント」、「カッコ」と短くなることと同様で、日本語では一般的なことであり、窪菌は指摘している（「アニメーション」の略が「アニメ」とならないことも参照）。
13. しかし、「～本」という複合語では、長さが 4 モーラ以下か 5 モーラ以上かでたまたま連濁の差が見られるが、それ以外のものにはそうした明確な差がない。例えば、「青空」と「曇り空」はどちらも「～ヅラ」となる。
14. なお、単に 5 モーラ以上の「テレ」もしくは「てれ」で始まる語であれば、同辞典には、「テレホンカード」、「テレビ塔」、「てれかくし」、「てれくさい」もあった。しかし、本節では単純語の外来語で短縮を起こす名詞を問題にしているので、明らかに複合語であるものや、和語や、(品詞が名詞でなく) 形容詞であるものは除いた。ちなみに、辞書では古臭くなった語と新語の入れ替えが行われるものであるため、同辞典の第九版 (2010) になると、「テレタイプ」、「テレックス」、「テレホンカード」は外されて、「テレビゲーム」、「テレビでんわ」が加えられている。
15. 青山拓央氏 (個人的対話) から、「テレビ」が 3 モーラになるのは、テレビより先に存在した「ラジオ」^{radio} radiotelegraphy の影響も考えられるというご指摘をいただいた。
16. 「コン」で始まる誰もが知っている外来語としては、「コンパス」が挙げられるが、「コンパス」は 4 モーラしかないため略語にはならず、競争相手とはならない。
17. 「プロフ」が (音でなく文字に基づいて) 「プロフェッショナル」の略と混同される可能性は、「プロフェッショナル」には「プロ」という略語の使用が定着しているため、ない。
18. 本稿では競争相手の語も『例国 第九版』からとっているが、(23f) に関してだけは他の辞書を参考にした。
19. 「プレゼント」を「プレゼン」としたのでは、ほとんど略したとは言い難い状態である。よって、「プレゼン」では「プレゼント」を指す可能性があると考えする必要はそもそもないのかもしれない。
20. ちなみに、「研究室、実験室」は英語では lab と略されるが、日本語では「ラボ」という具合に微妙に異なるように、collaboration の英語の略は collab. となることにも注意されたい。
21. 日本語の複合語の短縮であれば、「結婚活動」→「婚活」のように中ほどを残すものも散見されるが、単純語の場合には、頭から音をとることが標準的で、英語の flu のように中ほどの要素を抽出する略語にはめったに出くわさない。
22. 「インテリア」が末尾の「ア」だけ消えて略語になるということはありません。そうにないため、「インテリ」があいまいということはあまい。

参照文献（辞典類は省略）

- Bauer, Laurie (1983) *English Word-formation*, Cambridge: Cambridge UP.
- 別宮貞徳 (1977) 『日本語のリズム』 講談社現代新書.
- Ito, Junko (1990) "Prosodic minimality in Japanese," *CLS 26-II*, pp. 213-239.
- 影山太郎ほか (2004) *First Steps in English Linguistics* 第2版, くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』 くろしお出版.
- Kubozono, Haruo (1996) "Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation," 『音声学会会報』 211, pp. 71-82.
- Kubozono, Haruo (2003) "The syllable as a unit of prosodic organization in Japanese," in C. Féry and R. van de Vijver (eds.) *The Syllable in Optimality Theory*, Cambridge: Cambridge UP, pp. 99-122.
- 窪菌晴夫 (2004) 「音韻構造から見た単純語と派生語の境界」『文法と音声IV』 くろしお出版, pp. 123-143.
- 窪菌晴夫 (2010) 「語形成と音韻構造—短縮語形成のメカニズム—」『国語研プロジェクトレビュー』 3, pp. 17-34.
- 窪菌晴夫・小川晋史 (2005) 「『ストライキ』はなぜ『スト』か?—短縮と単語分節のメカニズム—」大石強ほか編『現代形態論の潮流』 くろしお出版, pp. 155-174.
- 窪菌晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』 研究社.
- Labrone, Laurence (2002) "The prosodic structure of simple abbreviated loanwords in Japanese: A constraint-based account," 『音声研究』 6-1, pp. 98-120.
- NTT コミュニケーション科学基礎研究所監修 (1999) 『日本語の語彙特性』 三省堂.